

スペイン語圏を知る本  
(その35)

川口 剛 著

『スペインのBARがわかる本』

バルク・カンパニー 2005

評者 坂東 省次

スペインと言えば「闘牛の国」、「フラメンコの国」、「美術の国」、「ワインの国」などで知られるが、スペインはまた「バルの国」であると思う。スペインに実際に行って少しでもそこに住んだ経験のある人なら、必ずそのように思うだろう。そんなスペインのバルの存在に異常とも言えるほどの関心を示し、スペインから帰国後、本書『スペインのBARがわかる本—グラナダ・バルの調査記録報告書』を書いて出版にまでこぎつけたのは、現在、札幌在住の川口剛氏である。

「帰国後—あとがきにかえて」には、著者の出版の期待がこう書かれている。少し長いが引用する。

「最後に、この『スペインのBARがわかる本—グラナダ・バルの調査報告書』は、スペインのバルに魅せられ、バルがスペインで最も魅力のある文化の一つだと信じて疑わない私が、2000年1月31日から3月5日までの約1ケ月間スペインに滞在し、朝から晩までバルに入り浸り、飲んででは尋ね、食べては調べ、観ては考えた「記録」である。そして同時に、これからスペインへ行く人にはバルに入っても困らない便利な「2冊目ガイドブック」として、スペインから帰ってきた人には様々な記憶を思い起こさせる「紀行書」として、スペインやスペイン料理が好きなお人々には楽しい「読み物」として、またこれから地中海の居酒屋でも開こうかと考えている人には読んで損のない「参考書」として、さらには都市や地域の計画にたずさわる人や高齢化社会の問題に取り組む人にも示唆的な「報告書」として、気軽にこの本を読んでいただけるのではないだろうか、というのが私の期待である。」

スペイン人はじつによく飲み、よく食べ、よ

く喋る。食い道楽の国である。当然、彼らの集う場所が各地、各所に生まれる。bar, café, cafetería, taberna, bodega, mesón, cervecería など飲食店を表すことばは多様である。そんななかでもbar（バル）はもっとも注目すべき場所であり、スペイン人の生活の核がここにあると言えるだろう。

barは英語のbar（バー）に由来するという。英語のバーはもともと棒状の物体を意味する言葉であったが、それが飲食物を客に供するバーカウンターを指すために、後にカウンターを持つ飲食店そのものを意味するようになったという。

ところで、著者とバルとの出会いは、著者が建築学を専攻していた学生時代にさかのぼる。著者はスペインを訪れ都市で営まれる生活空間とそこに流れる時間にすっかり魅了された。そしてその背後にあるのがバルであり、著者はバルをスペインの都市生活の重要な構成要素と考える。

著者はバルの調査に選んだ都市は人口30万のグラナダ。詩人ガルシア・ロルカの生誕の地として世界的に有名な場所である。本書は飲む[beber]、観る[observar]、食べる[comer]、考える[pensar]、話す[hablar]の5章からなり、著者はこれら5つの観点からバルに徹底したアプローチを試みている。

著者は最後に、「バルは日本のコーヒーショップやカフェと何が違う？」というコラムを設け、日本のコーヒーショップやカフェとスペインのバルの違いを考察して、興味深い結論に至っている。結局、日本のコーヒーショップやカフェは、他人に干渉されずに自由に過ごすことのできる時間を提供する場所であり、一方スペインのバルは、客と客の、あるいはカウンター越しの客と店員の、日常的なコミュニケーションの場としての意味を果たしている。スペイン人にとってバルとは家庭につぐ「第二の居場所」なのである。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）